

(援助の中で) みんなの中で落ち着いて行動する子

岸 田 富 夫

## 1, 対象児のプロフィール

生徒名 H. M (男)

昭和49年 5月10日生 (中2)

鳥取市N小学校より本校中学部に入学。

重度自閉症

◎遠城寺式乳幼児発達検査

項 目	移 動	手の運動	基本的習慣	対 人	発 語	言語理解
発達年齢	4:8	3:4	3:4	2:0	1:9	1:6

### (1) 一般的特性

○集団の中で着席行動がとれないことが多い。

○環境になじめず、嘔吐したりする。

○土いじり、水遊び等が好きである。

○小さい子、女の子などに抱きつく、叩く、つねったりする等の行動がある。

○偏食、好き嫌いはほとんどないが、汁物は苦手のようなのである。

○言葉はほとんど「おうむ返し」である。

○身辺処理はほぼできる。

○音楽が好きで、知っている曲がかかると、リズムにあわせて跳んだり、足踏みをしたりする。

### (2) 問題点および取り上げた理由

新年度を迎えクラス編成があり、落ち着きがなく、教室内をウロウロする、飛び出す、等の行動や、本児の嘔吐が頻繁にあった。また、身体が大きく、指先の力が強く、叩いたり、つねくったりすると内出血することがあるため、他の生徒を傷つけないように配慮する必要があった。

友達との好ましい人間関係を確立して、一緒に様々な学習ができることは、将来の社会自立を目指す上でも必要不可欠なことと考え、上記のテーマを設定し、本児とクラスの友達との好ましい人間関係を確立するための指導を試みた。

## 2, 研究の仮説・取り組みの構想

上記の問題点から個人目標を「みんなの中で落ち着いて行動する子」と設定し、次のような研究仮説を立てた。

『友達と関わる場面を生活の中に多く取り入れれば、友達と好ましい人間関係を作り、落ち着いて学習などに取り組むことができる。』

研究に当たっては次のような指導方針により取り組むことにした。

(1) 本児の行動に担任が常に関わり、他の生徒の行動を話したり、声かけを行い、共に行動することを促す。

(2) 土いじりや水遊びは、ある程度認めるが、後始末をきちんとさせる。

(3) 他の生徒を叩いたり、つねったりした場合は、厳しく注意する。

- (4) 嘔吐の後始末は、本児の精神状態の様子を判断して、できるようなら、後始末させる。
- (5) 着席行動がとれない場合には、体育館あるいは外で落ち着くまで遊ばせる。
- (6) 家での行動や学校での行動を生活ノートなどで連絡し合い、家庭との連携を強化する。

### 3. 指導実践例

#### (1). 生活単元学習での取り組み - 秋の運動会の場合 -

本単元は、9月初旬より秋の運動会までの約1カ月間の単元で、個人別種目、組体操、ピアニカ鼓隊の練習や、準備にみんながとりかかった。組体操の練習では、始めは何のために手を上げたり降ろしたりするのかが理解できず、また、練習途中から、演技が変わって高等部の生徒と「塔」を作ることになり、おびえて、攻撃的な態度をとることがしばしば見られたが、毎日の練習の繰り返しと、「よく頑張った」とか「よくできた」とかの言葉がけにより、運動会に近づくにつれ、自分から「ピッ、ピッ」と笛の音をまねて手を上げたり降ろしたり、「塔」を作る土台として頑張るようになった。

予行演習の時は、組体操の順番を覚えていて、練習通りに行うことができたが、運動会の当日は、今までの中で、1番長く演技をしたので、イライラしてつめくったりしたが、最後まで、演技を続けることができた。

#### (2). 作業での取り組み - 軽作業（バインダーの吊り金入れ）の場合 -

作業活動	本児に対する配慮事項	本児の活動の様子
① 吊り金を準備する。	① 道具などを準備する時はなるべく一人で取りに行かせるが、必ず、指導者が、行動を確認する。	① 指示をして、しばらく容器で遊んでいたが、持って来ることができた。
② 吊り金入れをする。	② 指導者が横に座り、本児が入れた吊り金を止めていく。 作業に集中するように声掛けをしながら作業の取り組みさせる。	② 何も指示しなくても作業を始める。途中、席を立とうとするが、作業の終りの見通しが見え出すと集中して取り組むことができた。
③ 後始末をする。 ・吊り金が落ちていないか確認する。	③ 後始末は、指導者が指示を与え、友達と一緒にさせる。	③ 最初に吊り金の落ちている場所を指示をすると、他の場所に落ちている吊り金も拾って容器に入れることができた。

この時間は、2学期終り頃の職業の時間である。本児は、この作業を1年生の時からしているが、本年度の1学期と比較しても作業個数は多くなり、作業に集中して取り組むようになった。特に、目の前の作業個数が減ることによって、作業の速度が速まっていくことは予想外の成果であった。

(3). 学校と家庭との連携による指導

新しい環境・課題に向かうとき、すぐに情緒不安に陥り、友達などの腕を強くつかんだりする本児に対して、家族は、本児の学校生活に大変な不安を持っていることが、生活ノート、個人懇談、家庭訪問などで解った。

そこで、学校での様子や希望など、また家庭での様子や希望などを生活ノートを使って連絡をするようにした。ここではその指導の一端を紹介してみたい。

① 前述の本児の特性として挙げた嘔吐について

環境に慣れたのか、指導の成果かは判断しがたいが、嘔吐がかなり少なくなった。また、嘔吐の理由もほぼ判断がつくようになった。

表1. 各月に対する嘔吐回数

月	4	5	6	7	8	9
嘔吐回数	79	54	34	4		6
月	10	11	12	1	2	3
嘔吐回数	1	0	1	1	1	0

後始末は、1、2学期は、自分で拭こうとはするが、汚物を拭き取ってしまい、拭き取るまでには至らなかったが、3学期は、「アトシマツ」と言いながら、汚物を広げることなく取り、きれいに拭き取ることができた。

嘔吐が少なくなってから、本児の体重増加が、顕著に現れた。

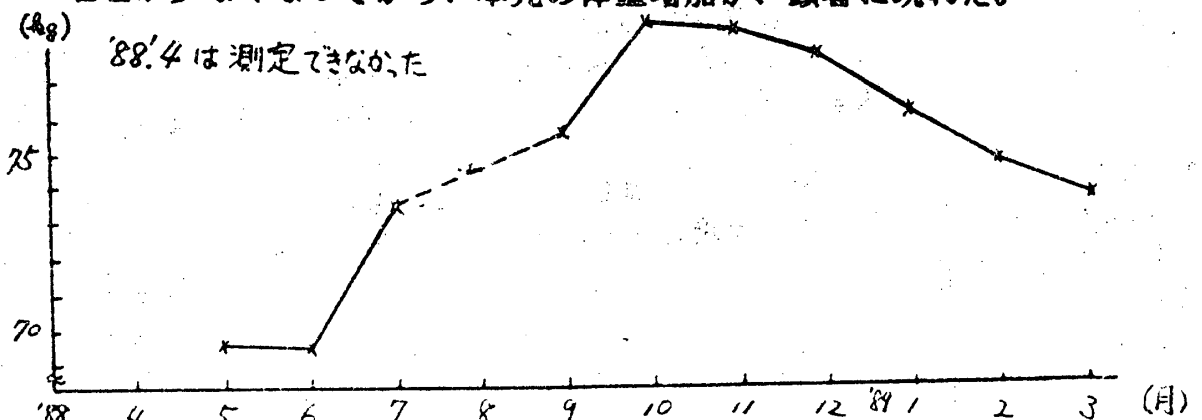


図1. H. Mの月別体重推移

10月頃、本校の養護訓練講師から「体重増加が異常な為、足の裏の変形や姿勢などの変形が起こりつつある。」と、指摘され、生活ノートを通して、食事制限をお願いした。ところが、家庭からは、本児が自閉症のため、夜遅くまでおきていることもあり、保護者は早く寝てもらおうと、食べさせていたのである。

「家庭の事情も理解できるが、本児の体に関わること」と、2回、栄養に関する懇話会に参加してもらい、「いっぺんには無理だけど少しずつやってみます。」という返事を頂いた。学校からも、今までは欠席者の給食を分けて与えていたが、それをやめ、他の生徒より少しだけ量を減らすことを試みた。その効果は、徐々にではあるが、現れてきている。

## ② 宿泊学習の仕事分担について

本児の家庭でのお手伝いは、食器洗い、風呂掃除、てんぶら等を揚げる等である。そこで、学校でも、宿泊学習の中で、家庭でのお手伝いと同じ仕事を取り入れた。これまで4回の宿泊学習を行ってきたが、特に4回目の学習では、何も指示しなくても食器を洗い、布巾で拭いて、食器棚にしまうことができた。

## 4. まとめと反省

4月当初、少し不安そうな本児も、担任やクラスの生徒に慣れ、7月頃には、みんなの行動を気に掛けながら、一人で遊んだり、みんなと一緒に遊ぼうと近寄る行動を見せ始めた。それにつれて、他の生徒をつねることは少なくなったが、挨拶のつもりで、肩や背中を叩く「トントン」が、他の子どもたちにとっては「ドンドン」になり、本児を恐れ、本児と関わるのが困難になりつつある。

また、勝手に教室を飛び出すことが少なくなり、トイレに行くときも、「おしっこ」・「うんこ」等の言葉を繰り返す言い、担任の許しを得てから、行くようになった。

これは、1つの成果かも知れないが、私自身が、本児と他の生徒との接触を恐れたために、過干渉になっていたのではとも思われる。

更に、自閉特有のこだわりが色々有り、「糸のほつれ」が大変気になるようで、シャツ・体操服6枚、ズボン類8本をほどいて、駄目にしてしまった。これに対しての指導が、服やズボンを取り上げるだけしかなかったのは今後の課題である。また、音楽や体力作り、特にボール運動などを通して、他の生徒との関わりが育つような、コミュニケーションの確立を目指していきたい。